

哲学分野

規範性と多元性の歴史的諸相

(CANONE)

メンバー

内山勝利（京都大学大学院文学研究科教授・リーダー）
川添信介（京都大学大学院文学研究科助教授）
佐々木丞平（京都大学大学院文学研究科教授）
中畑正志（京都大学大学院文学研究科助教授）
中村俊春（京都大学大学院文学研究科教授）
根立研介（京都大学大学院文学研究科助教授）
福谷 茂（京都大学大学院文学研究科助教授）
小林道夫（大阪市立大学大学院文学研究科教授）
浅沼光樹（龍谷大学非常勤講師）
井澤 清（京都大学非常勤講師）
稲本泰生（奈良国立博物館学芸科教育室長）
大草輝政（日本学術振興会特別研究員）
木原志乃（日本学術振興会特別研究員）
國方栄二（京都大学非常勤講師）
周藤多紀（セントルイス大学大学院在学）
平川佳世（近畿大学文芸学部講師）
村上正治（京都大学大学院文学研究科研修員）
劔持あずさ（山口県立美術館学芸員）
深谷訓子（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）
皿井 舞（京都大学非常勤講師・研究会補佐員）
和田利博（京都大学大学院文学研究科COE研究員）

研究会の趣旨

われわれの研究会は、現代世界において、たとえば伝統文化の「多様

性」・「多元性」とグローバリズム的「一元性」・「普遍性」の相克に見られるような、両者の対置をすぐれて基本的な問題ととらえて、その本質を歴史的諸事象に遡行して検討し、本来あるべき調停の方向への示唆を得ることに努める。研究は、当初次のような二つの視点を設定してこれまでの研究成果の蓄積に立った問題集約に努めつつ、漸次議論の総合化を図っていくものとする。シンポジウム・研究会などは原則として合同で開催し、相互の意見交換を積極的に行うことで、思想・文献研究と図像中心の研究との結合にも取り組む予定である。

< 哲学知の継承と変容 > 異文化とのたえざる接触・融合の中で、多様な事象への関わりが哲学知へと収斂していく過程、および世界の多様性への認識においてそれが活性化されつつ展開されていく過程の解明、西洋中世スコラ哲学においてキリスト教信仰を前提とした哲学知が、「異他的なるもの」特にアリストテレス哲学とどのように接触しそれらを受容していったかの解明、ヨーロッパ近世、とりわけ17世紀の啓蒙思想において非ヨーロッパ世界との出会いが何をもたらしたかの解明などに重点を置き、世界の多様性の中で哲学知がいかに変容しつつ確保されていくべきかを探る。

< 藝術作品における規範と創造 > 過去の美術の世界においては、洋の東西を問わず、規範とされる作品が存在し、美術家たちは、それらの作品を手本としつつ創作を行うことが求められてきた。その一方で、規範は、しばしば、藝術の自由な展開を拘束する足枷とも見なされ、美術家たちはそれに反発を覚え、より自由な作品の創造へと向かったのである。しかし、元来は規範への反発から生み出された作品も、後世に新たな規範としての地位を獲得するということもあって珍しくない。こうして多様な規範が存在するようになるのである。こうした視点から、西洋におけるイタリア美術と北方美術との関係、および、日本における和様彫刻ならびに狩野派絵画と中国美術との関係などの具体的・歴史的事例に即して、規範の作用と反作用の交錯の場としての創造の力学を考察する。

活動状況

2002年11月21日研究会「平安後期仏教美術の諸相」

於：美学美術史学研究室 15：00～18：00

- ・緒方知美（学術振興会特別研究員）「平安時代の經典見返絵の構図の分化とその展開」
- ・松岡久美子（栗東歴史民俗博物館学芸員）「山門の秘法 四天王法の成立 滋賀県常楽寺蔵《釈迦如来及四天王像》をめぐって」

< 概要 >

本セクションは、「和様」というわが国独自の美術規範が成立したと繰り返し語られてきた平安後期の美術史観の再検討を目指している。今回は、二人の若手研究者に、經典見返絵と仏画の図像という観点から平安時代の仏教美術に関わる発表をしていただいた。各発表の概要は、以下の通りである。

まず、最初の緒方氏の発表は、經典の見返しを通して平安後期の絵画史の再検討を試みている。平安時代の装飾経は数多く現存するが、その中心となるのが、10世紀頃から認められる紺紙金字法華経で、平安後期に入る遺品は40件を超えている。法華経説話画が自然の風景を伴って描かれるのを常とする当時の紺紙金字法華経見返絵は、東アジアに広がる法華経説話画の展開という図像学的観点からだけでなく、平安時代における風景表現の展開の観点からも重要な研究対象になる。とくに、11世紀半ばの平等院鳳凰堂壁扉画や京都国立博物館山水屏風（11世紀）に代表される絹本や板地の障屏に彩色された大画面絵画とは異なる紙本に線描で描かれた小画面説話画が、どのような空間構成の展開をたどり、どのような特質を持つに至るかという過程を、見返絵を通して具体的にたどることも可能かと思われる。

氏の発表は、こうした観点から、改めて滋賀・百濟寺本、岩手・中尊寺一切経といった当代を代表する法華経見返絵を取り上げ、さらに大英博物館版本金剛般若波羅蜜経（中国・唐、868年）といった大陸の作例にも目を配り、平安後期の見返絵の展開について再検討を試みた。結論として、わが国平安後期の經典見返絵は、新局面を拓くことのなかった大陸の見返絵と対照的に、空間構成の変化や画題の限定という問題によ

って、小画面説話画としての成熟を遂げたとする。さらに、氏は經典見返絵と絵巻の関係にも触れられ、きわめて刺激的な発表を行われた。

続く、松岡氏の発表は、滋賀県常楽寺に伝えられる鎌倉末期頃に制作されたと思われる「釈迦如来及四天王像」(重要美術品)を取り上げ、天台宗独特の図像が何故、平安末期後白河院政期頃に再評価され、鎌倉時代にこのような画像として描かれるにいたったかを考察した。

氏は、まずこの画像の図像等の検討から、中尊の釈迦如来像の印相が初門の釈迦、すなわち叡山西塔釈迦如来像の姿を表すもので、四隅の四天王像は、聖徳太子の物部守屋討伐のエピソードと結びつく、四天王寺様の四天王像であるとし、この画像が『門葉記』『阿婆縛抄』等に山門の秘法として記される四天王法の本尊となる遺例稀な画像であることを明らかにされた。そして、こうした特殊な四天王法は、叡山では後白河院期に新たに登場してくると推測されるという注目すべき点も指摘された。

白河、鳥羽、後白河と続く、平安院政期には、しばしば新奇な尊像を本尊とする修法が流行したことはすでにしばしば指摘されているが、山門の四天王法は、日本国内の伝承に題を取り、既存の修法を再評価し、新たな修法として誕生したものと言える。こうした修法のあり方は、やはり院政期仏教の性格の一面を良く表している。常楽寺本は、この修法が誕生してから少し時間を経た時期に描かれたものであるが、平安時代末の院政期の美術の諸相を考える上で貴重な遺品と言えよう。

2002年12月15日「レンブラント・コロッキウム」

於：京都大学文学部新館第一講義室 13:00～20:00

司会：平川佳世(近畿大学講師)

- ・小林頼子(目白大学助教授)

“The Backgrounds of Rembrandt’s Paintings -Their Function and Meaning”

- ・中村俊春(京都大学助教授)

“Rembrandt’s *Andromeda*”

- ・尾崎彰宏(東北大学教授)

“Rembrandt and the Melancholy”

- ・Norbert Middelkoop(アムステルダム歴史博物館学芸員)

“Rembrandt as Portrait Painter and *The Anatomic Lesson of Dr. Deijmann*”

< 概要 >

17世紀オランダで活躍したレンブラント（1606 - 1669年）は、西洋美術史上もっとも偉大な画家の一人として高く評価されている。しかし、一方で、彼の芸術は、その過度な自然主義的描写ゆえに、美の規範からの逸脱として、古典主義者たちによって、しばしば、厳しく批判されてきた。平川の司会により開催された本コロッキウムでは、四つの研究発表を通して、さまざまな視点からの、彼の芸術の再検討が試みられた。

小林は、レンブラントの絵画における背景の表現法に着目して、その構成の特徴を詳細に分析した。その際、ファン・マンデルやライッセなど、17 - 18世紀のオランダの美術文献に述べられた“doorsien”（見通し空間）などの構図構成に関する用語が検討され、レンブラント作品との関連が明らかになった。中村は、レンブラントが制作した最初の神話画である《アンドロメダ》を取り上げて、その主題の表現がきわめて特殊であること、人体表現における優美さの欠如などを指摘した。そして、レンブラントがバルタザール・ジェルピエのホルツィウス追悼詩に刺激されてこの絵を描いた可能性について指摘した。尾崎は、レンブラントの手になる自身および妻サスキアを描いた数多くの絵画や素描において、顔を手にのせて肘をつくという伝統的なメランコリー気質のポーズが認められることに着目して、レンブラントとメランコリーの問題に関する詳細な考察を行った。芸術家にとってのメランコリー気質の意味、さらにはデューラーとの関連が詳しく論じられた。ミッデルコーブは、《デイマン博士の解剖学講義》が外科組合を飾る絵として如何なる特徴を有していたのか、同時代ならびに後世の作品との比較を通じて明らかにした。また、レンブラントが、肖像画において、それまでの図式的な表現を打破し、時間性を導入することに成功したことを多彩な作品に基づいて論じた。ミッデルコーブをアムステルダムから招いた国際コロッキウムという性格上、発表ならびに質疑応答はすべて英語で行われたが、来聴者からも数多くの質問が出て、長時間に及ぶ熱気あふれる研究会となった（13時から始まった会が終了したのは20時前のことである）。なお、このコロッキウムの研究発表を集めた論文集が、2003年末に刊行さ

れる予定である。

2002年12月20日～21日調査

於：山形県寒河江市本山慈恩寺

本山慈恩寺当局の協力を得て、実査を行い、各像の詳細な写真撮影を行った。

調査対象：

- ・木造騎獅文殊菩薩及脇侍像 4軀（重要文化財）
- ・木造騎象普賢菩薩十羅刹女像 5軀（重要文化財）

調査参加者：

- ・根立研介（本研究科助教授）
- ・皿井舞（美学美術史学D3）
- ・山内舞子（美学美術史学M1）

< 概要 >

現在、本山慈恩寺の本堂の宮殿内に安置されている群像で、いわゆる五台山文殊化現像の一群と、普賢菩薩に法華経持者の守護尊十羅刹女とを組み合わせた一群からなる。一部の像が失われているが、おそらく当初は釈迦如来像の脇侍群像として平安時代末頃に造られたものとみられ、その中尊像については現在阿弥陀堂に安置されている阿弥陀如来像を当てる見解もある。

文殊（像高37・6cm）・普賢（像高37・5cm）の二菩薩像は、ともに檜材を用い、一木割矧造りの技法で造られ、表面を彩色と切金文様で装飾している。この二菩薩の乗る獅子や象については、概ね当初の姿が保たれている点は注目される。一方、文殊菩薩の脇侍像（像高39・5～42・3cm）も用材はいずれも檜を用いるが、造像技法は優填王像については一木割矧造り、他像については一木造りとし、4軀とも彩色仕上げとする。十羅刹女像（像高36・5～41・7cm）は、檜材を用いた一木造りの技法で造られていて、表面はいずれも漆箔、彩色、切金文様で装飾している。

引き締まった顔立ちや、漆箔の上に彩色、さらには精緻な金銀の切金文様を施すような入念な加飾の仕方は、平安末期の京都の仏像表現や装飾法がほとんど時を置かずにこの地にもたらされたことを示す。当代の仏教美術の伝播の問題を考える上で重要な遺品であり、また中国に源を

発する五台山文殊の日本に於ける受容を考える上でも見逃すことの出来ない遺品である。

2002年12月24日 哲学哲学史合同研究会

於：京都大学文学部新館第七講義室 13：00～17：30

・多田光宏（西洋近世哲学史D3）

「ショーペンハウアーにおける禁欲の体現者としての「聖人」 その倫理学において持つ意義について」

<概要>

ショーペンハウアーの著『意志と表象としての世界 正編』において、アジジの聖フランシスコは「禁欲の真の人格化」と評されているが、ショーペンハウアーにおける禁欲は、キリスト教における完徳の方法ではなく、ある個人が「聖人」であることの徴表である。従って、ショーペンハウアーにおける禁欲は、キリスト教的な意味においてだけでなく、日常的な意味においても用いられているような、何らかの目標を達成する為の方法としての努力を意味しているのではない。禁欲は、努力をその根本的な性格とする意志の否定を先行体験としてのみ可能となる。この禁欲の体現者である「聖人」は、キリスト教における聖人ではなく、「意志の否定」の体現者である。

ショーペンハウアーは「聖人」を倫理学において扱うが、有徳者とは区別する。有徳者とは、苦痛を契機として形而上学的な意志において自己を同一化し得る者であり、「自分と他人の苦しみとの間に均衡を作り出そうと努め、他人の苦しみを緩和する為に喜びを諦め、不足を忍ぶ」者である。有徳者は、形而上学的な意志において、現象的により大きな苦痛を避けようとする。しかし、それは苦痛の平均化をもたらすだけであり、苦痛からの完全な解放をもたらさない。

それに対して、世界の真相が苦痛であることを自らの苦痛の極限状態において直接的に確信することによって、「諦め」という仕方ですべての努力を放棄する者が「聖人」である。ここにおいて「意志の否定」という体験が生じ、意志と不可分であった苦痛からの完全な解放がもたらされる。しかし、「意志の肯定」と身体の存続は本質的に同一のことなの

で、その体験は持続しない。それ故に、「快適なものの拒否と不快なものの追求によって意志を意図的に挫く」という禁欲が生じる。即ち、解放の体験の契機となる苦痛の極限状態にその身を置き続けるということが、ショーペンハウアーにおける禁欲の本質なのである。このとき、苦痛は避けられるべきものではなく、迎え入れられるものとなる。このことが意味しているのは、禁欲を体現する「聖人」が苦痛という感情を核心とする有徳者を超えており、苦痛を唯一の意味とする方法とは全く異なる仕方世界を捉え得る可能性を示唆しているという意義を持っているということである。このことによって、「聖人」は、倫理学において、道徳にその限界を自覚させる役割を果たすのである。

- ・周藤多紀(中世哲学史OD/セントルイス大学)「徳と認識 トマス・アクィナスにおける親和性による認識」

< 概要 >

トマス・アクィナスは正しい判断に至るのに二つの道があると主張している。一つは「理性の完全な使用による」ものであり、もう一つは「(判断する)対象との親和性(ennaturalitas)による」ものである(S.T. - , q.45,a.2,c.)。後者の認識様態については、次のような事柄がその具体例として考えられている。

- (a)「貞潔の徳をもっていれば、貞潔さに関わる事柄へのある種の親和性によって、そのような事柄を正しく判断する。」(S.T. - , q.45, a.2,c.)
- (b)「より大きな愛徳があるところにはより大きな欲望があり、その欲望は、何らかの仕方、欲望する者をして、欲されているものを受容するにふさわしく、かつ準備された者とする。したがって、より愛徳をもつものは、より完全な仕方、神を見、より至福なものとなるだろう。」(S.T. , q.12, a.6,c.)

これらのテキストは、認識主体が有する徳が、我々の倫理的そして宗教的知識の獲得において重要な役割を果たすことを示唆している。そこに見てとられるのは、ある徳を有するものは、その徳が関係する対象を認識するための適応性を有し、その適応性によって、対象を正しく、あるいはより優れた仕方認識するという認識論的構図である。

親和性による認識の概念は、倫理的・宗教的認識の個別性や情意性にふさわしい説明を与えるように思われる。親和性の有無によって各人の認識の様態は異なるはずであり、トマスによれば、親和性とは一種の「愛」であって、「愛」は、愛する対象への「欲望」をもたらし、さらにその欲望が満たされる時には「喜び」をもたらすからである。「親和性」による判断が「理性の完全な使用」ないしは「理性による探求」によってなされる判断と対置されていることから、親和性の認識の非推論的性が伺える。理性のメルクマールは推論にあるとされているからである。このように我々の認識、とりわけ倫理的、宗教的認識が個別的事であること、情念と強い結びつきを有すること、また非推論的 (non-inferential) でありながら正当化されうることが、現在、米国を中心に盛んになりつつある「徳認識論 (virtue epistemology)」が、従来の現代知識論に比した場合の、その理論的優位性として強調する諸点である。したがって、トマスの「親和性による認識」は、今日の哲学界の文脈においても十分に注目すべきものを含んでいるように思われる。

本発表では、まずトマスの「親和性」の概念の用法を分析し、続いてその「親和性」が我々の認識において、どのような仕方で関与するかを解明した。さらに「親和性による」と呼ばれる認識が、倫理的・宗教的認識の場面において、「正しい理性の使用による」認識とどのように異なっており、それがどのような哲学的意義を有するかを考察した。

2003年2月19日研究会「近代日本絵画における伝統的規範の伝承」

於：京都大学文学部新館第六講義室 13:00～15:00

- ・ Jhon D.Szostak (ワシントン州立大学大学院博士後期課程、フルブライト大学院研修員、本学研究生)「秦テルヲのモダニスト伝画」

< 概要 >

明治時代から現代に至るまで、仏教に関わる主題がなおも頻繁に取り上げられ、院展や日展そしてその他の様々な公募展にもこの種の絵画がよく見られた。こうした現象については様々な解釈が可能であるが、この種の作品は当時美術展に登場してきた「古典的」な日本芸術の作例と、近代的な作品とを結びつける任を果たしていたとも考えられる。しかし

ながら、こうした仏教的な主題の作品は「展示絵画」として一部では評価されたが、「仏画」としては失敗しているという批評もなされた。たとえば、矢代幸雄は、狩野芳崖の「悲母観音」について、それが伝統的な仏教主題を利用しているにしても、制作の動機が真に宗教的な感情から発したものでなければ、作品としては成功していないという見解を述べている。

それでは、近・現代の宗教的な芸術作品が、芸術的な側面と宗教的な側面の両方から成功するためには、何が必要であろうか。この問題を、秦テルヲの作品、特に1937年に制作された「仏化開縁の図」を取り上げて考察してみる。この作品は、注文者の手紙によれば、ある信心深い老女の見た夢に基づいているが、構図には「二河白道図」や「地獄草子」「地獄極楽図」などの伝統的な仏画の影響があることは明らかである。しかしながら、画面の中には近代的な添加物も見られる。たとえば、様々な「主義」(「唯物主義」「個人主義」「民主主義」「世界主義」など)が書かれた抗議運動の幟を持って、浄土に渡ろうと渴望する人々からなる群衆が描かれている。こうしたものは老女の夢に出てきた可能性もあるが、少なくとも一部は作家の自伝的要素を含んでいるのではなかろうか。したがって、この作品を読み解くためには、テルヲの人生及び芸術活動を知る必要がある。そして、こうした試みを行った結果、この作品はテルヲが伝統的な宗教絵画を参考にしながら、個人的な寓話を創り出したものであるという結論を得た。すなわち、「モダニスト仏画」には、テルヲの「仏化開縁の図」に見られるように、伝統に基づく宗教的な要求と、モダニズムの創造的な要求という両者が併存することが必要なのである。

2003年3月12日研究会

於：芝蘭会館 14：00～18：00

- ・山内志朗(新潟大学人文学部教授)「西欧中世の大学における学問の規範性と多元性 イスラーム哲学の受容と存在の一義性」

< 概要 >

発表者山内氏は次の順序で、西洋中世のスコラ哲学に対するイスラーム哲学の影響を主張された。

1. 13世紀における神学教育（テキストとしての『命題集』と大学）
2. 神学の扱い（トマス・アクィナスとドゥンス・スコトゥスの相違）
3. <存在>の一義性
 - 《一義性概念》
 - 《潜在的に含む》
 - 《形相的区別》と《自同的述定》

より具体的にはアヴィケンナの『形而上学』5巻に登場する「馬性の格率」、すなわち「馬性は馬性にすぎない」という存在論の主張が、スコトゥスにおいて神学と形而上学との接合を可能ならしめたのである。つまり、形而上学の対象としての「存在としての存在」と神学の対象である「個体本質としての神」とが、「潜在的に含む」という仕方で結びつけられことになっているのである。

研究発表ののち、川添信介によるコメントがあり、その後参加者との活発な討論が交わされた。

2003年3月15日研究会「デューラーとティツィアーノ」

於：京大会館 14：00～15：00

- ・平川 佳世（近畿大学講師）「規範としてのデューラー：ルドルフ二世の宮廷における北方ルネサンス美術の受容と翻案」

<概要>

ルネサンスのドイツを代表する画家アルブレヒト・デューラーの諸作品は、制作当初より常に多くの模倣を引き起こしていたが、とりわけ、16世紀末から17世紀初頭にかけての北方ヨーロッパでは、デューラー作品の模倣、借用、翻案がにわかに集中する、いわゆる「デューラー・ルネサンス」と呼ばれる現象が確認される。本論では、この「デューラー・ルネサンス」の中心地の一つであり、最も質の高い作例を輩出した神聖ローマ皇帝ルドルフ二世のプラハの宮廷に目を向け、ルドルフ二世によって収集されたデューラーの作品が、宮廷で活動する画家たちによって翻案されていく過程を、具体的に考察した。

稀代の芸術愛好家であるルドルフ二世は、質、量ともに他に類をみないデューラー・コレクションを形成していたが、ルドルフ二世の宮廷における「デューラー・ルネサンス」の性格は、こうした極めて質の高い

数多くのデューラーの真筆作品の存在に規定されていると考えられる。例えば、デューラーの油彩画を購入できない一般的な美術愛好家の間では、絵画風の彩色を施したデューラーの版画、あるいは、デューラーの版画を賦彩模写した油彩画が流行していたが、こうした実践はブラハの宮廷においては、ルドルフが収集したデューラーの素描を絵画化する実践へと変貌を遂げている。ヤコブ・フフナーヘルの《ペリシテ人と戦うサムソン》等、描かれた個々の作品を分析すると、ルドルフ二世という洗練された愛好家のもとでデューラー素描の絵画化を行う画家の側にも、それを文字通り賦彩模写するだけでなく、自らの創意を加えて翻案しようという意識が生まれているのがわかる。また、ヤン・ブリュゲル(父)の二枚の板絵で構成されたデューラーの素描《大カルヴァリオの丘》の保存箱においては、扉の開閉という行為を通じて古の画家と現代の画家の競合を鑑賞者が享受するという独特の鑑賞形態が認められるが、これは、バイエルン公マクシミリアン一世が所有していたデューラーの板絵《ルクレツィア》にも共通するものであり、ルネサンス絵画に対するこの時代特有の鑑賞形態といえる。クラナハ作《ユーディット》やレオンハルト・ベック《竜を退治する聖ゲオルギウス》など、ルドルフ二世が収集した他のドイツ・ルネサンスの画家たちの作品にも、ハインツやスプランゲルの手により、翻案作品あるいは対となる作品が描かれており、古の画家の作品に現代画家の作品を対比させることでより複合的な享受形態を生み出そうとする態度がみてとれる。

総じて、ルドルフ二世の宮廷における北方ルネサンス美術の翻案・競合は、手本自体の質の高さと翻案作品のそれが拮抗し、鑑賞者の心を強く魅了する稀有な例といえよう。

- ・ 剣持あずさ(美学美術史学DC2)「ティツィアーノ展(2003年2月19日～5月18日於: ロンドン・ナショナル・ギャラリー)」

< 概要 >

2003年2月19日より5月18日まで、ロンドンのナショナル・ギャラリー、セインズベリー館において、『ティツィアーノ展』が開催されている。カタログによれば、本展覧会開催の主旨は、ナショナル・ギャラリーが所蔵する十一点のティツィアーノ作品を、意味のある流れの中に位置付

け、よりよく理解する機会を提供することである。さらに、本展覧会には最大の目玉として、かつてフェラーラ公アルフォンソ・デステの書齋「カメリーノ・ダラバストロ」を飾っていた絵画作品が、約400年ぶりに集まるといふ企画も用意されている。

展覧会会場は六室にわかれており、展示構成は、大きく次の五つのグループにわけることができた。すなわち、1510年代の初期作品（第一室、二室）、「カメリーノ」の再構成（第二室）、1530年代の作品（第三室）、1540年代の肖像画（第四室）、晩年の作品（第五室、六室）である。

このような展示の中で特に目を引いたのは、やはり「カメリーノ」の再構成である。第二室の一角を使って、今回再現された配置は、左壁に《バッカスとアリアドネ》（ロンドン、ナショナル・ギャラリー）、正面壁に左から《アンドロス島の人々》（ブラド美術館）、《神々の祝祭》（ワシントン、ナショナル・ギャラリー）、ドッソ・ドッシによる失われた「ウルカヌスのいるバッカナーレ」（実際の展示では空き場所）、右壁に《ヴィーナスへの奉獻》（ブラド美術館）であった。このうち、《神々の祝祭》は、ジョヴァンニ・ベリーニにより描かれた後、他作品との統一感を出すためティツィアーノによって加筆されたものである。しかし会場の混雑も手伝い、再現された「カメリーノ」の「統一感」をじっくり味わうことは困難であった。展覧会の目玉であるならば、「カメリーノ」の部分に明確に区画するなど、より独立した形での展示方法が検討されてもよかつたのではないだろうか。

出品作品の主題および年代は、ティツィアーノの画歴全般からバランスよく選別されており、総出品数は四十三点であった。従って展覧会全体としては、画家の幅広い制作活動を包括的に紹介しており、美術館側の主旨にかなっていたといふことができる。しかしその結果、逆に展覧会全体を通じたテーマが見えにくくなってしまった。目玉である「カメリーノ」の再構成のみに焦点を絞る、または特定の主題を集め様式の変遷を追うなどして、全体のテーマを限定したほうが、より統一感のある展覧会になったと思われる。

2003年4月26日研究会

於：京大会館 13：00～17：00

- ・小原 琢「トマスにおける分離靈魂の認識仕方について *praeter naturam*としての*modus cognoscendi*」

< 概要 >

トマスによれば、現世の人間は身体的な死を迎えても、知性だけは存続する。身体から切り離されて存在するこの知性を分離靈魂という。ところでトマスの認識論の根本原則は、認識仕方は存在仕方に従うということである。それゆえ現世の人間に見出される知性の認識仕方は、身体的な死による存在仕方の変更にもなって何らかの新しい認識仕方に変更されてゆく筈である。本発表ではトマスに即して、身体を失った分離靈魂の認識仕方について為しうるかぎり考察したい。

- ・藤本 温 (名古屋工業大学)「意図と結果 - Thomas Aquinas, ST, II-II,64,7 - 」

現代の行為の哲学において、行為の善悪の関する判断に「意図」と「結果」を区別する考え方の歴史的源泉として西洋中世哲学が挙げられることがある。この発表では、ピエール・アベラールの意図を重視する行為論について概略が示された後に、トマス・アクィナスと「二重結果 (double effect) の理論」の関係が吟味された。すなわち、「意図した結果」と「意図してはいないが、ある程度予見可能な副次的結果」とを区別する現代の二重結果の理論と『神学大全』2部の2第64問7項における「自己防衛の殺人」をめぐる理論とが対照され、行為の或る結果と別の結果の比較という観点を取る二重結果理論と、行為と目的との間の釣り合いという視点を取るアクィナスの行為理論とは、相違が大きいと結論された。

2003年6月21日研究会

於：京都大学文学部新館第一講義室 14：30～18：00

- ・増記隆介(大和文華館研究部員・神戸大学大学院文学研究科客員助教授)「我が国における普賢十羅刹女像の成立と展開 「和装本」を中心に - 」

< 概要 >

我が国における法華経美術の歴史の中で、平安時代後期から鎌倉時代を中心に多くの普賢十羅刹女像が描かれたことは、記録の上からも知られ、現存作品は二十点余を数える。『法華経』『普賢菩薩勸発品』第二八、及び『観普賢菩薩行法経』に説かれる普賢菩薩の影向に、「陀羅尼品」第二六において、法華持経者を守護すると説かれる二菩薩、二天王、十羅刹女、鬼子母を併せ描いた普賢十羅刹女像の図像は、従来、平安時代後期に我が国において独自に成立したものとされてきた。但し、唐から元代に至る中国における普賢菩薩像の遺例を概観すると、普賢十羅刹女像そのものは見出せないものの、その先蹤となり得るような、普賢菩薩に天女等の眷属が伴う図像を見出すことができる。我が国における普賢十羅刹女像の図像形成には、規範とすべき大陸の先例のあったことが想像される。

我が国における普賢十羅刹女像の遺品には、羅刹女が羯磨衣等のいわゆる「唐装」を成すものと女房装束の「和装」を成すものとが存在する。現存作品から考える限り、唐装のそれが和装に先行すると思われ、このことも、大陸における規範の存在を予想させる。忠尋『法華文句要義聞書』、長宴『四十帖決』等の記録から11世紀前半における普賢十羅刹女像の存在が予想されるが、前書においては、その濫觴を9世紀、円仁の在世中に遡らせ、彼の入唐との関わりを示唆する。十羅刹女の持物等については、『法華十羅刹法』に説かれるが、最古の掛幅本である京都・廬山寺本（唐装、12世紀末）においても、図像と所説は相違し、規範となる儀軌からの乖離が早い段階から起こったとみられる。

十羅刹女の「和装化」は、12世紀前半にその濫觴があるものと私考されるが、大治二年（1152）頃の「扇面法華経冊子」表紙絵が、最古の遺例である。これに続く「平家納経」、旧益田家本、奈良国立博物館本等の和装本を概観すると、「扇面法華経冊子」の十羅刹女の図様がそれらの中で繰り返し描かれ、和装十羅刹女像の規範とされたと考えられる。また「平家納経」においては、和装の羅刹女が厳島社の祭神・伊都伎島神を象徴することが、興然『五十巻鈔』の記載から判明する。神仏習合を背景とする、この和装化の構造は、十羅刹女が我が国の女神とダブルイメージとなり得ることを後世に示し、これ以降の和装本の展開に一つの指針を与えた。

このように普賢十羅刹女像においては、唐装本という、大陸由来の規範の形成とその多様化、唐装本から和装本への展開、和装本における規範の形成とその多様化等の様々な次元における規範の形成と展開を確認できる。但し、多様化は先行する規範を否定するものではなく、和装本の成立以降、唐装本とそれは並行して描かれ、また、和装本における十羅刹女の「形」は連綿と継承されている。この現象を注視することが日本美術における「和様化」の構造を考える一つの端緒となるのではないだろうか。

- ・ 皿井舞 (本学非常勤講師) 「調査報告 ポストン美術館蔵作品を中心に 」

2003年2月23日から3月6日まで12日間、アメリカ東海岸の主要美術館を中心に調査旅行を行った。まず、ニューヨーク・メトロポリタン美術館では、京都・九品寺旧蔵像を中心とする日本の彫刻、ならびに北魏から元・金代にまで至る中国彫刻を中心に調査をおこなった。ボストンでは、ボストン美術館、ハーバード・サックラー美術館を訪れた。ボストン美術館では、快慶無位時代の作品として名高い文治五年(1189)制作の弥勒菩薩立像を主としながら、紀年銘があり基準作として重視すべき中国の石造四面造像碑などを、サックラー美術館では、やはり年記のある作品を中心に資料収集を行った。さらに、クリーブランド美術館、シカゴ美術館へも足をのばしたが、飛行機の便の関係で十分な時間をとることはできなかったものの、東洋美術の充実したコレクションにあらためて目を見張った。

調査報告としては、ボストン美術館蔵快慶作弥勒菩薩立像を出発点としながら「鎌倉時代初頭彫刻史における古典学習をめぐる問題」について、これまでの研究の問題点と今後の展望について考察を行った。

まず、ボストン像については、それに以後の快慶の作品に見られる端正さを認め、その先駆的作品として積極的に評価しようとする論考もあるが、やはり、その三年後に制作された三宝院弥勒菩薩坐像との作風上の径庭は大きいものと私考され、その差異をいかに把握するかは、初期慶派の様式形成を考える上で重要である。三宝院像での面部のやわらかな肉付きは、むしろ興福寺南円堂空羂索観音像に近いようにも思われ、

快慶の作風形成の一端にも南円堂の復興造営が大きく関与している可能性も考えられるのではないだろうか。また、ボストン像については、岐阜・横蔵寺大日如来像との近似性が西川新次氏等によって指摘されているが、快慶の出自の問題も含め初期慶派の様式については改めて検討する必要があるものと考えられる。

ところで、いわゆる鎌倉新様式の形成には古典学習が大きく関与することは周知のとおりであるが、古典学習の問題を扱う上で気を付ける必要があるのは、形状や作風の比較の際、現存する作品が極めて限られた上での比較であることと、比較対象になる作品の時代区分が現在の美術史学で提唱されているものにすぎないという点であると考えられる。古代の作品との細部の形状の比較は、重要な作業であることは事実だが、そのような比較においては、総体として仏師等がどのような像を範と見なしてしていたか、あるいは発願者の意向といった個々の造像におけるコンテキストが脱落してしまっているように思われる。

こうした問題点を踏まえれば、平安末から鎌倉時代初頭にかけての古典学習の問題については、個々の作品の制作背景を押さえながら、それが範としていた作品が何であったかを明らかにすることが必要であろう。今後は、それを起点として当時の古典学習のあり方を跡付けていきたい。

今後の活動

2003年7月19日(土)・20日(日)「西洋近世哲学史懇話会・研究会」

19日 於：楽友会館 13:00～18:00

- ・吉川康夫「真理不在状況での判断根拠の問題」
- ・酒井修「原典の解釈学(3) 個体および個性の問題」

20日 於：御車会館 9:00～12:00

- ・佐藤慶太「トレルチにおける歴史主義と『決断(Entscheidung)』」

2003年8月27日(水)「講演会」

於：京都大学文学部新館第五講義室 15:00～17:00

- ・Gregory P. Levine (カリフォルニア州立大学パークリー校助教授)
「アメリカの美術史界における東洋美術の受容；大徳寺五百羅漢図をめぐって」

2003年10月4日シンポジウム「Academica 学の制度と規範」

於：芝蘭会館 13:00～17:30

<パネリスト>

- ・野町 啓(流通経済大学教授)
「ユダヤ人 ヘレニズム ローマ帝国 紀元一世紀アレキサンドリアのフィロンの場合」
- ・森 雅彦(宮城女子学院大学教授)
「前近代イタリアの美術アカデミーをめぐって フィレンツェとローマを中心に」
- ・佐々木 丞平(本学教授)
「狩野派の「学画」と「質画」をめぐって」
- ・福谷 茂(本学助教授)
「「伝統の発明」と哲学的アカデミズムの成立 カントとクーザンの場合」

シンポジウムの趣意

Academica プラトンが古代ギリシアのアテナイに設立した学園アカデメイアに由来するこの言葉は、この学園が西欧の学問研究の源に位置することによって、学園の構成員や学派だけでなく、知的な営みや学術組織一般をも指すようになった。さらに現在では、たとえば英語のacademicは、「空疎な」「机上の空論にすぎない」という意味で日常的に使われている。現代的用法には、学問研究と現実の社会生活との遊離した今日の状況が示唆されているであろう。

しかし、このような状況は、プラトンのアカデメイア創設の意図とは対極にある。彼は、その当時すでに無用の知的遊戯（現代の侮蔑的な意味でのacademic!）と見られていた「哲学」が現実社会のなかで力をもちうるために、教育研究の組織と制度を実現したのである。実際、いかなる知的営みも、人間社会において何らかの位置を占めようとするかぎり、一定の組織や制度は不可欠であろう。

もちろん組織体制の整備は、施設環境だけでなく知のスタイルと内実にもかかわる。多くの場合、一定の信条や典籍、技法が規範化され、それに基づく教育、研究、制作のプログラムも制度化される。その結果、そこには安定とともに、停滞の可能性も生じるであろう。しかし同時に、制度化と規範化に回収されない新たな知の運動も、むしろそうしたなかから誕生するであろう。

このシンポジウムは、まず、この言葉の大本にあったプラトンの含意にいったん立ち戻り、思想や作品の背景で機能していた規範と制度を具体的に解明することを目指して企図された。思想家や芸術家、制作者たちはどのような体制のもとで、何を学び、どのような規範やモデルに依拠しあるいは抵抗したのか。制度や規範は人々の営みをどのように支え、また拘束したのか。制度と規範をめぐる知と技のダイナミズムの一端が、多様な時代と地域の実例の検討を通じて明らかにされるであろう。

さらにこうした考察が、さまざまな知的・芸術的活動の環境的基盤を明らかにすることを通じて、Academicaの現代の派生的用法が示唆するような、学術活動と現実社会との関わりという問題を再考する手がかりとなることを願っている。